

公開セミナー「『知』の現場から」

原 武 史

2009年度は、10月から12月まで、全部で10回にわたり、「『知』の現場」からと題する公開セミナーを行った。私が附属研究所の所長になってから、これが二回目の公開セミナーになる。

2008年度の公開セミナー「『政治思想』の現在」（2009年6月に同じタイトルで河出書房新社より刊行）が、一人による講義形式と二人による対談形式とが混在していたのに対して、今回はすべて対談形式とした。ただし回によっては、事実上講義形式になる場合もあった。また、前回は講義や対談のテーマを事前に決めていたが、今回はあらかじめテーマを決めず、いかなる「知」を論じるかを大づかみに設定しただけで、あとはぶっつけ本番で臨むことにした。

今回もまた、セミナーと同じタイトルで河出書房新社からの刊行が予定されている。単行本化にあたっては、読者の便宜を考慮し、各対談の内容から判断して各回ごとにテーマをつけた。こども、それらのテーマを掲げておいたほうがよいだろう。

全10回の対談者と「知」の名称、そしてテーマを次に掲げる。

1.	10月6日	内田樹×高橋源一郎	哲学／教育	「先生」に何ができるか
2.	10月13日	島菌進×原武史	宗教学	皇室と宮中祭祀をめぐる
3.	10月20日	川上弘美×高橋源一郎	文学1	小説を書くということ
4.	10月27日	青山七恵×原武史	文学2	言葉を紡ぐということ
5.	11月10日	御厨貴×原武史	政治学	現代政治のなかの皇室
6.	11月17日	酒井順子×原武史	鉄道論	女子の乗り方、男子の乗り方
7.	11月24日	斎藤環×原武史	精神医学	皇室という環境
8.	12月1日	福岡伸一×高橋源一郎	生物学	生命のダイナミズム
9.	12月8日	姜尚中×原武史	歴史認識	万物は流転する
10.	12月15日	坪内祐三×原武史	都市論	街の記憶のつくられ方

このように、今回は哲学から精神医学まで、教育から鉄道論までの幅広い「知」をテーマに多彩なゲストを迎え、私と高橋源一郎教授が対談相手をつとめる形がとられた。毎回、5限に当たる午後4時45分から6時15分までの1時間半のうち、1時間をトーク、30分を会場からの質疑応答にあてた。

前回は政治思想という、私が専門とする狭い領域を共通のテーマとしたのに対して、今回はもっと間口を広げ、多くの一般市民が関心をもてるようにしたうえ、すでに新しい形式にしてから二回目ということで認知度も高まっていたせいか、ほとんど毎回、前回は上回る参加者にめぐまれた。とりわけ、姜尚中教授を招いた12月8日は、600人収容の大教室に入りきれず、臨時の

椅子を出してもなお立ち見が出るほどであった。会場は熱気に包まれ、質疑応答は途中で打ち切らざるを得なくなった。

ではなぜ今回は、前回とは打って変わって、『「知」の現場から』という包括的なテーマを掲げたのか。

それは、本学部の理念に関係している。

本学部ホームページの「国際学部理念・方針」には、「総合的な理解力を養うために、本学科では文化・経済・政治の3部門が相互に緩やかにのりいれる群構成を採用しています。高い専門性を追究しながら、学問の垣根をとりはらった学際的な学習と研究に、みなさんは取り組むことができるでしょう」と書かれてある。つまり国際学部というのは、国家と国家の壁ばかりか、学問と学問の壁までも取り払い、「知」の相互乗り入れを図ることを看板に掲げた「学際学部」でもあるわけだ。

したがって、哲学、宗教学、文学、政治学、精神医学、生物学など各分野の最先端で活躍する方々をお呼びして、ご著書だけでは知りえない仮説や裏話などを直接うかがうという試みは、本学部の理念ともまさに一致しているのである。鉄道論や歴史認識、都市論といった、どの学問の枠組みにも収まりきれない問題について論じ合えたこともまた、「学際学」の幅を広げることができたと自負している。

各回のセミナーの具体的中身については河出書房新社より刊行の『「知」の現場から』を見ていただくことにして、ここでは2008年度と09年度に公開セミナーを開催したことを通して見えてきたものについて述べておきたい。

第一に、これだけ情報があふれ、インターネットなどを通して必要な知識を手軽に入手できる時代になっているにもかかわらず、その講師にしか語りえない生の「知」を求める人々がいかに多いかを知らされたことである。

大学のある戸塚区の方々はもとより、電車とバスを乗り継いで1時間以上かかる東京都から、毎回のセミナーを楽しみに来られているという方、毎回のセミナーの感想をその都度手紙で丁寧にとってくださった方、終わって2カ月もたってから、A4の紙10枚にわたって全体の感想を書いて送ってくださった方など、予想をはるかに上回る反響に正直戸惑うとともに、大学のあり方について深く考え込まざるを得なかった。

第二に、そのような方々の多くは高齢者であり、いわば第二の人生を充実させるべく、セミナーに熱心に通われていることである。壇上に何度も登っていると、そのうちの何人かの方々は顔まで覚えてしまった。年金暮らしの身には、無料の公開セミナーは実にありがたいというご意見もいただいた。本が売れない、教養書が売れないという声を聞いて久しいが、人々は決して「情報」だけで満足しているわけではない。とりわけ、家に引きこもり、一人になりがちな高齢者にとって、ふだんは本でしか読むことのできない講師の生の肉声に耳を傾け、人間的な触れあいを実感することの意味は大きいのではないかと感じた。

第三に、肝心の学生の出席率は高齢者ほど高くはなかったが、他大学の学生が熱心に出席して

いることである。そうした学生は、大学のいかに問わず、問題意識が非常に高く優秀な場合が多い。その中には、私のゼミにも出席するようになり、ゼミ生とも親しく交流するようになった学生もいる。もちろん、制度的には単位互換や図書館の共同利用など、大学間の垣根を低くする試みはこれまでに成されてはいるが、必ずしも活用されているとはいいがたい。公開セミナーは、「大学生」と「社会人」の壁を取り払うばかりか、「本学学生」と「他大学学生」の壁をも取り払うのだ。それは国際学部が掲げている、グローバルな場で活躍できる人材の育成という目標とも決して矛盾しないと思われる。

第四に、経済的な理由によって、勉学の意欲はあっても大学に進学できなかった方々にとって、セミナーが事実上、大学としての役割を果たしていることである。特に今回の公開セミナーでは、高齢者に交じって、若い世代の方々が、東京での仕事をやりくりしながら熱心に参加されていた。反面、入学金や授業料を払いながら、通常の大学の講義では居眠りしている学生もいるわけで、これまた大学の現状を深く考え込まざるを得なかった。

このように、毎回の魅力的な講師の話から受ける知的刺激もさることながら、公開セミナーという形式そのものが、いまの大学のあり方に再考を促すさまざまな要素をはらんでいると実感させられた。さらには本学部のように、東京郊外の住宅地にキャンパスをもつ大学のあるべき姿についても考えさせられた。